

駒宮神社。日向シャンシャン馬の伝統

駒宮神社には数多くの馬の像があり、地域の歴史の中で、馬が重要な役割を果たしてきたことを感じさせてくれます。現在の宮崎県のあたりは、少なくとも奈良時代（710～794 年）から馬の繁殖地として有名で、駒宮の近くには何世紀にもわたって多くの繁殖場がありました。そのうちの一つである立石は、神社から約 4km 離れた場所にあり、伝説の初代天皇である神武天皇の言い伝えにちなんだ伝承が残っています。物語では、龍神が若き神武に龍石という馬をプレゼントし、二人は切っても切れない関係になっていく。神武が成長し、偉大な支配者になるために故郷の村を出発するとき、彼は愛馬を置き去りにしなければなりません。神武と龍石は、江戸時代（1603～1867 年）まで馬の放牧場があった立石で別れたと言われています。

飢肥藩（現在の宮崎県南部沿岸地域）の大名であった伊東家は、信仰と庇護の象徴として毎年駒宮神社に馬を寄進していました。毎年恒例のお祭りでは、近隣の村の人たちが集まり、馬をモチーフにした踊りを披露したり、馬の競売を行ったりしていました。このような行事が、現在でも日南市全域で行われている、新婚夫婦が精巧な装飾を施した馬に乗るのを主体として様々な形で行われるようになった「シャンシャン馬」の伝統を生み出したと言われています。シャンシャンという言葉は、装飾した馬の馬具についている鐘の音を表していると考えられています。